

令和2年度 保護林モニタリング調査結果一覧

1 モニタリング調査の結果、影響が確認できた保護林（モニタリング実施間隔：10年）

【モニタリング間隔 5年の基準】（要領第5-2）

- ア：遷移の途中段階にある保護林
- イ：復元を行っている保護林
- ウ：保護対象の個体群の持続性に問題がある保護林
- エ：保護林外部からの影響を受けている保護林
- オ：鳥獣・病害虫被害及び移入種による影響が顕著にある保護林
- カ：温暖化による影響が顕著にある保護林

【保護林への影響の種類】（モニタリングマニュアル）

- ア. 野生鳥獣
- イ. 病害虫
- ウ. 外来種
- エ. 温暖化
- オ. 自然攪乱
- カ. その他
- ク. 影響なし

番号	計画区	保護林区分・番号	保護林名称	面積(ha)	確認出来た影響	評価	管理方針書への反映 (モニタリングの実施間隔及び留意事項)	要領第5-2: 5年の要素 (R2調査)
1	会津	生態 4	おくあいづ 奥会津森林生態系保護地域	83,890.79	—	方形の植生プロット(004-1~004-8)として設定されている自然低木群落、湿原・雪田植物群落、自然ササ草原も群落構造に大きな変化は見られず、良好な状態で維持されている。また、今年度新たに設定した尾瀬側の円形プロット2点については、004-9は自然林でオオシラビソの大径木が上層を占めており、林床植生についても豊富で、次世代を担う稚樹、実生も多く生育していた。004-10は二次林で、004-9ほどの大木は生育していないが、健全なオオシラビソ群落が生育している。林床植生についても004-9と同様に豊富で、実生や稚樹も多く確認されている。	本保護林は、野生鳥獣による被害や病虫害等は見られず、良好な状態で維持されていると評価されるため、前回調査時同様に今後の兆候の変化に留意したモニタリングを継続していくことが重要である。	—
2	会津	希少 5	いいで 飯豊スギ希少個体群保護林	36.00	—	上層を構成するスギの大径木は健全に生育しており、次世代を担う保護対象種の低木及び稚樹や実生も確認されている。  【059-1〔継続〕】2015年：低木層50%、草本層40%→2020年：低木層40~80%、草本層10~70% 【059-2〔継続〕】2015年：低木層70%、草本層30%→2020年：低木層50~60%、草本層10%	・ツキノワグマによる樹皮剥ぎの被害が見られるが、樹勢に影響を及ぼす程度ではなく、現時点では健全に生育しているため、被害の程度や樹勢に留意しながら今後も調査を続けていく必要がある。 ・植被率の変化	—
3	会津	希少 7	くいまるとうげ 喰丸峠ケヤキ遺伝資源希少 個体群保護林	5.93	—	上層を構成する高齢のケヤキは概ね健全に生育しており、その林床では、次世代を担うケヤキの実生や稚樹が確認できたことから、保全対象であるケヤキの遺伝資源の保存には大きな問題は生じていない。 今年度の調査の結果から、本保護林は良好な状態が維持されていると評価する。  【019-1〔継続〕】2015年：低木層70%、草本層60%→2020年：低木層20~30%、草本層40~60% 【019-2〔継続〕】2015年：低木層50%、草本層70%→2020年：低木層40~50%、草本層50~60%	保護対象種であるケヤキの高木層~低木層及び稚樹等は健全に生育していると評価できるが、近年、台風による大きな風害、豪雨等が頻発しており、暴風による幹折れが懸念されるケヤキも生育していることから、定期的な巡視による確認、対応が必要と考える。	—
4	会津	希少 8	りゅうのやま 龍ノ山キタゴヨウマツ遺伝資源希少 個体群保護林	5.63	—	・調査プロット内外には、ツキノワグマの樹皮剥ぎによる被害が確認された。 ・上層を構成するキタゴヨウマツは健全に生育している。次世代を担う中低木は見られないが、実生は確認されている。  【018-1〔継続〕】2015年：低木層60%、草本層30%→2020年：低木層70%、草本層30% 【018-2〔継続〕】2015年：低木層40%、草本層60%→2020年：低木層60%、草本層80%	・上層のキタゴヨウマツは健全に生育しているが、次世代を担う中低木が確認されていない。 ・スギの大径木にツキノワグマによる樹皮剥ぎが見られる。樹皮剥ぎの影響による樹勢の低下等は見られないが、今後の生育に留意する必要がある。	—
計			4箇所	83,938.35				

# 令和2年度 保護林モニタリング調査結果一覧

## 1 モニタリング調査の結果、影響が確認できた保護林（モニタリング実施間隔：5年）

【モニタリング間隔 5年の基準】（要領第5-2）

- ア：遷移の途中段階にある保護林
- イ：復元を行っている保護林
- ウ：保護対象の個体群の持続性に問題がある保護林
- エ：保護林外部からの影響を受けている保護林
- オ：鳥獣・病害虫被害及び移入種による影響が顕著にある保護林
- カ：温暖化による影響が顕著にある保護林

【保護林への影響の種類】（モニタリングマニュアル）

- ア. 野生鳥獣
- イ. 病害虫
- ウ. 外来種
- エ. 温暖化
- オ. 自然攪乱
- カ. その他
- ク. 影響なし

番号	計画区	保護林区分・番号	保護林名称	面積(ha)	確認出来た影響	評価	管理方針書への反映 (モニタリングの実施間隔及び留意事項)	要領第5-2: 5年の要素 (R2調査)
1	会津	希少 9	おぐにぬましつげん 雄国沼湿原希少個体群保護林	174.13	乾燥化による出現種の変化	・過年度と比較し低木層の侵入が多く確認され、出現種数も増加していることから、湿原の乾燥化が進行しているとみられる。特に湿原の入り口付近の構成種及び出現種数の変化が著しい。 ・湿原内に獣類(クマ)の足跡のようなものを確認。イノシシを目視。 【060-1〔継続〕】2015年:低木層90%、草本層70%→2020年:低木層40~50%、草本層60~70%	前回調査の5年前と比較し、湿原内の構成種や出現種数の変化が大きいため、調査頻度を増やし、湿原の変化をモニタリングしていく必要があると考える。	カ
2	利根下流	希少 40	ねもとさわ 根本沢シオジ遺伝資源希少個体群保護林	21.28	ア ニホンジカ	・上層木を構成するシオジを含め、生育している立木に枯損、折損、倒伏等は認められず、健全に生育している。 ・低木層、草本層が少なく、林床は見通しの良い状態。一部の低木は1.5m以下の高さまで梢端や枝先に食痕が見られる。草本層について1、2年生程度の実生は点在するが、草本の分布は僅かで落葉に覆われた林床が露出している。 ・急傾斜地であり、表土が流出し一部の立木の根が露出している。 ・林床についてニホンジカの食害の影響を受けているとみられる。 【030-1〔継続〕】2015年:低木層30%、草本層20%→2020年:低木層40%、草本層10% 【030-2〔継続〕】2015年:低木層10%、草本層30%→2020年:低木層10%、草本層20% 【030-3〔継続〕】2015年:低木層10%、草本層10%→2020年:低木層10%、草本層5%	・ニホンジカの長期的な過食圧による影響で低木層・草本層はほとんど見られない。 ・シオジの実生は存在するが、ニホンジカにより幼齢期の生長が阻害され、長期的には更新木の確保が懸念される。	ア
3	伊豆	群集 13	はっちよういけ・かわこだい 八丁池・皮子平生物群集保護林	636.70	ア ニホンジカ	上層を構成するブナやヒメシャラ等は病虫害、気象害等は見受けられないが、保護林全体としてニホンジカによる食害が著しく、ニホンジカの忌避植物とされている植物の生育が目立つ。林床植生の生育も僅かであり、保護対象種の低木や実生の生育も僅かであった。 【045-1〔継続〕 森林生態系基礎調査ID:9221509】2015年:低木層20%、草本層80%→2020年:低木層0%、草本層20~60% 【045-2〔継続〕 森林生態系基礎調査ID:9221511】2015年:低木層20%、草本層10%→2020年:低木層0~20%、草本層0% 【116-1〔継続〕 森林生態系基礎調査ID:9221510】2015年:低木層70%、草本層10%→2020年:低木層0%、草本層0%	ニホンジカの食害による影響が著しく、保護林全体で林床植生の生育が僅かであることから、保護対象種の後継木が乏しいため、保護林の維持継続のためには、ニホンジカの密度管理対策の更なる強化などの対策に講じる必要があると考える。	ア
4	伊豆	希少 74	かわこざわ 皮子沢モミ希少個体群保護林	11.26	ア ニホンジカ	上層を構成するモミは老齢木が多く、幹折れや枯損している個体が散見される。また、保護林内部の林床植生の多くが地衣類に覆われており、次世代を担うモミの低木、稚樹・実生はほとんど見られない。 【117-1〔継続〕 森林生態系基礎調査ID:9221512】2015年:低木層20%、草本層30%→2020年:低木層0%、草本層30~50% 【117-2〔継続〕】2015年:低木層10%、草本層70%→2020年:低木層5%、草本層65~85%	・上層を構成するモミは老齢木が多く、幹折れや枯損している個体が散見されることから、保護対象種の樹勢が低下傾向にあると考えられるため、今後の生育状況に留意する必要がある。 ・また、モミの低木や稚樹・実生がほとんど見られず、プロット内部やアクセスルートにはニホンジカの剥皮害や食痕等の痕跡が確認されているため、今後の被害の増減に注意する。	ア
5	伊豆	希少 75	かんてん 寒天モミ希少個体群保護林	11.29	ア ニホンジカ	上層を構成するモミについては健全な状態で維持されているが、次世代を担うモミなどの低木や稚樹の個体数は僅かであった。ニホンジカによる過食圧によりプロット内の林床植生の植被率は著しく低下している。 【122-1〔継続〕 森林生態系基礎調査ID:9221514】2015年:低木層20%、草本層20%→2020年:低木層20~30%、草本層5~10% 【122-2〔継続〕 森林生態系基礎調査ID:9221515】2015年:低木層20%、草本層30%→2020年:低木層30~40%、草本層5%	・上層木を構成するモミは健全に生育しているが、稚樹・実生の個体数が少ない。 ・林床植生にニホンジカによる食害の影響が顕著に現れているため、保護群落の更新・持続的な保全のために、ニホンジカ侵入防止柵の設置による林床植生の回復、ニホンジカ生息個体数の管理などのニホンジカ対策を検討する必要がある。	ア
6	伊豆	希少 76	つげのみね 黄楊の峯ツゲ希少個体群保護林	18.85	ア ニホンジカ	保護対象種であるツゲの生育地は131-1周辺の保護林北部であるが、健全に生育している。次世代を担うツゲの低木についてはプロット内で確認されている。 【131-1〔継続〕 森林生態系基礎調査ID:9221520】2015年:低木層60%、草本層30%→2020年:低木層30~50%、草本層5~10% 【131-2〔継続〕 森林生態系基礎調査ID:9221521】2015年:低木層30%、草本層40%→2020年:低木層60~100%、草本層5%	・保護対象種であるツゲは健全に生育しているが、林床植生はニホンジカによる過食圧により、ほとんど見られない。 ・林床植生にニホンジカによる食害の影響が顕著に現れているため、保護群落の更新・持続的な保全のために、ニホンジカ侵入防止柵の設置による林床植生の回復、ニホンジカ生息個体数の管理などのニホンジカ対策を検討する必要がある。	ア

番号	計画区	保護林区分・番号	保護林名称	面積(ha)	確認出来た影響	評価	管理方針書への反映 (モニタリングの実施間隔及び留意事項)	要領第5-2: 5年の要素 (R2調査)
7	伊豆	希少 77	じょうれん 浄蓮ウラジロガシ・アカガシ希少 少個体群保護林	37.35	ア ニホンジカ	上層を構成するカスミザクラなどの落葉高木やアカマツの老齢木は健全に生育している。ニホンジカの過食圧により、林床植生はほとんど見られない。 【126-1〔継続〕 森林生態系基礎調査ID: 9221516】2015年: 低木層10%、草本層5%→2020年: 低木層0~10%、草本層0% 【126-2〔継続〕 森林生態系基礎調査ID: 9221517】2015年: 低木層30%、草本層1%→2020年: 低木層0%、草本層0%	・上層を構成するカスミザクラやアカマツ、ウラジロガシ等は老齢であるが健全に生育している。 ・ニホンジカによる過食圧の影響により、林床植生はほとんど見られず、次世代を担う保護対象種の低木、稚樹・実生はほとんど確認できなかった。 ・大径木の根元にもニホンジカによる食痕が確認されているため、ニホンジカの生息密度が高い場所と考えられる。	ア
8	伊豆	希少 78	しらかわ 白川ウラジロガシ遺伝資源希少 少個体群保護林	5.08	ア ニホンジカ	・調査プロット内にはニホンジカによるものと思われる食痕が散見され、林床植生についてもニホンジカの忌避植物とされる植物の被度が高くなっていった。 ・上層のシイ・カン類の大径木は健全に生育しているが、次世代を担う中低木は少なく、植生調査でも低木及び草本層に僅かに確認されている。 【046-1〔継続〕】2015年: 低木層30%、草本層20%→2020年: 低木層10%、草本層5~50%	・上層のシイ・カン類の大径木は健全に生育しているが、次世代を担う稚樹、実生の個体数が少ない。 ・ニホンジカの食害による影響が顕著に現れていることから、保護群落の更新・持続的な保全のために、ニホンジカ侵入防止柵の設置による林床植生の回復、ニホンジカ生息個体数の管理などのニホンジカ対策を検討する必要がある。	ア
9	伊豆	希少 79	しらぬたの池モミ・スギ希少個 体群保護林	39.96	ア ニホンジカ	・121-1の上層を構成するモミの大径木については健全に生育しているが、モミの低木、稚樹、実生は全く生育していない。 ・ニホンジカの食害により影響が著しく、林床植生はほとんど確認できない。 ・121-2のモリアオガエルの生育環境については、過年度調査と比較し、大きな変化は認められなかった。 【121-1〔継続〕 森林生態系基礎調査ID: 9221513】2015年: 低木層60%、草本層10%→2020年: 低木層10~20%、草本層0~10%	・保護対象種であるモミを含め、低木層、草本層が全体的に極めて少なく、ニホンジカの食害による影響が顕著に表れている。 ・モリアオガエルの繁殖環境として重要なしらぬたの池の周辺環境については、過年度調査と比較し特に大きな変化は認められず、モリアオガエルの生息も確認できたことから、産卵環境としての機能を維持していると考えられるが、池の流出口付近の土砂堆積による立木の枯損や裸地化が見られるため、今後の調査結果に留意する必要があると考える。	ア
10	伊豆	希少 80	ちようくろう 長九郎シャクナゲ希少個体群 保護林	7.38	ア ニホンジカ カ 樹冠が閉鎖	小円部及び中円部において確認されたキョウマルシャクナゲは6本であるが、林内の樹冠が閉鎖しており、他の常緑広葉樹と競合している。次世代を担う、稚樹や実生の個体数は僅かに確認された。 【130-1〔継続〕 森林生態系基礎調査ID: 9221519】2015年: 低木層30%、草本層10%→2020年: 低木層0~20%、草本層0~20%	・樹冠が閉鎖しており、低木層が全体的に枯れ気味な傾向にあるため、今後の調査では保護対象種の樹勢に留意していく必要がある。 ・林床植生にニホンジカによる食害の影響が顕著に現れていることから、保護群落の更新・持続的な保全のために、ニホンジカ侵入防止柵の設置による林床植生の回復、ニホンジカ生息個体数の管理などのニホンジカ対策を検討する必要がある。	ア・カ
11	伊豆	希少 81	ねっこ 猫越ウラジロガシ希少個体群 保護林	11.28	ア ニホンジカ イ ナラ枯れ	上層を構成するウラジロガシの大径木にナラ枯れの被害が見られる。また、ニホンジカの食害による被害が顕著に現れており、保護林内の林床植生はほとんど見られない。 【127-1〔継続〕 森林生態系基礎調査ID: 9221518】2015年: 低木層60%、草本層0%→2020年: 低木層20~40%、草本層10% 【127-2〔継続〕】2015年: 低木層20%、草本層5%→2020年: 低木層5~10%、草本層40%	・保護対象種にナラ枯れの被害が発生しており、直ちに保護対象種が消失してしまうような状態ではないが、今後の調査結果に留意し、保護対策についても検討する必要がある。 ・ニホンジカの食害による林床植生への被害が顕著であることから、保護群落の更新・持続的な保全のために、ニホンジカ侵入防止柵の設置による林床植生の回復、ニホンジカ生息個体数の管理などのニホンジカ対策を検討する必要がある。	ア・イ
12								
計			11箇所					

【保護林への影響の種類】 (モニタリングマニュアル)

ア. 野生鳥獣 イ. 病害虫 ウ. 外来種 エ. 温暖化 オ. 自然攪乱 カ. その他 一. 影響なし

【モニタリング間隔 5年の基準】 (要領第5-2)

ア: 遷移の途中段階にある保護林  
イ: 復元を行っている保護林  
ウ: 保護対象の個体群の持続性に問題がある保護林  
エ: 保護林外部からの影響を受けている保護林  
オ: 鳥獣・病害虫被害及び移入種による影響が顕著にある保護林  
カ: 温暖化による影響が顕著にある保護林  
キ: その他、短期間で大きな変化が想定される保護林